

明治中・後期における郷土史談・郷土誌・郷土地理歴史（3）

—北海道・東北・関東地方の郷土史教科書—

木全 清博

1 明治中・後期の東日本の郷土史教科書の刊行状況

明治中・後期における郷土史談・郷土誌・郷土地理歴史の教科書について、これまで日本の各地方の発行状況を見てきた。近畿・中部地方は最初に本誌前号第18号で、中国・四国・九州地方は続編として本号で、各府県別の教科書発行の概要と郷土史の内容を中心に検討してきた¹。本稿では、東日本の北海道地方、東北地方、関東地方の郷土史教科書を検討する。国立国会図書館デジタルライブラリー本と東京書籍所蔵本（東書文庫本と略す）と国立教育政策研究所教育図書館所蔵本の近代教科書アーカイブ本（国研本と略す）を手がかりに内容の検討にあたる。各府県立図書館や市町村立図書館で所蔵が確認できた教科書は、発行教科書一覧表に入れていく。

最初に、東日本の郷土史教科書の概観を得るために、表1に北海道・東北地方、関東地方の発行年順の主な教科書一覧を示す。明治中・後期の郷土史教科書の全体像をつかむためには、生徒用だけでなく教師用も合わせてみていく必要がある。刊行趣旨や記述内容と構成から教師用として判断した郷土史を教科書にあげた。

以下では、表2に北海道地方、表3に東北地方、表4に関東地方の郷土史教科書の刊行一覧を掲げていく。各表は国立国会図書館近代デジタルライブラリー本を主として、東書文庫本及び国研本などを加えて作成したので、デジタルライブラリー本でない教科書は、東書、国研と注記した。明治初期にも、郷土史教科書は全国のいくつかの地域で発行されており、東日本では、『東京誌略』（著者大滝確荘）1877（明治10）年と『千葉県史略』（著者山田吉見）1881（明治14）年である。西日本では愛媛、岡山、山口、島根、鹿児島で発行されている²。

明治中・後期の郷土史教科書の刊行は、1890（明治24）年11月17日の文部省令「小学校教則大綱」が歴史教育の入門として「郷土ニ関スル史談」から始める指示を出したことが契機になっている。各府県は「小学校教則」改正で高等小学校第1学年の歴

¹ 木全「明治中・後期の郷土史談・郷土誌・郷土地理歴史—近畿地方と中部地方の郷土史教科書—」『歴史教育史研究』第18号 2020年、「明治中・後期の郷土史談・郷土誌・郷土地理歴史—中国・四国・九州地方の郷土史教科書—」『同上』第19号 2021年。

² 国立国会図書館デジタルライブラリー「地方の歴史」、『東書文庫所蔵 教科用図書目録』第2集 東京書籍 1981年、教育政策研究所教育図書館「近代教科書アーカイブ 検定期」。

史料の最初に位置づけている。表1に見るように、北海道及び東北地方の各県ですべて、府県（旧国）レベルの郷土史教科書の発行が確認できる³。関東地方では神奈川県だけ、府県レベルの郷土史が現段階で確認できない。

表1 北海道・東北地方・関東地方の郷土史教科書（発行年順）

| 「北海道・東北地方」 | | |
|------------|---------------------------------------------------------------------------------|-------------------------------------------------------|
| | 府県レベル | 郡市レベル |
| 1892（明治25） | 『宮城県史談』生徒用（東書） | 『日高郡志料沙流郡之部』 『我千島』北海道 『米沢史談』山形 『油川沿革史』青森東津軽郡 |
| 1893（明治26） | 『秋田県小学史略』上・下教師用 『小学教科秋田県史話』（東書・国研） 『秋田県小史』生徒用 再版（東書） 『福島県史談』生徒用（東書・国研） | 『庄内略史』『庄内史』山形 |
| 1894（明治27） | 『福島県郷土史談』再版（東書） 『新撰秋田史談』再版 誉田義英 『山形県史談』（国研） | 『由利郡地誌』秋田 『岩内古宇2郡誌』北海道 |
| 1895（明治28） | 『北海道史談』（東書・国研） | 『小学史話』宮城 <small>おしか</small> 牡鹿郡（国研） |
| 1896（明治29） | 『青森県史談』再版 『福島県地史談』 『小学校用福島県地理歴史教科書』（国研） | 『郷土地理歴史』山形東置賜郡 |
| 1897（明治30） | 『 <small>いわて</small> 巖手県郷土史』岩手（東書） 『小学教科秋田県地理歴史』（国研） | 『札幌沿革史』北海道 |
| 1898（明治31） | | 『陸奥津軽深浦沿革誌』青森 |
| 1899（明治32） | 『岩手県史談』 | 『函館沿革史』北海道 |
| 1903（明治36） | | 『上川発達史』北海道 『遠野史談』岩手 『柴田郡誌』宮城 |
| 1904（明治37） | | 『田村郡郷土史』福島 |
| 1907（明治40） | | 『鹿角志』秋田 |

³ 保科補編輯『地方沿革畧譜』内務省図書局 1882（明治15）年 報告社、内閣文庫所蔵 府県資料・マイクロフィルム版 雄松堂フィルム出版 1963（昭和38）年。東日本の各地方の府県の沿革は同書に従う。

| | | |
|---------------|----------------------|--------------------|
| 1908 (明治 41) | 『岩手県史』『秋田県史』 | 『最上郡史』 山形 |
| 1909 (明治 42) | 『宮城県繁栄誌』 | 『上富良野志』 北海道 |
| 1910 (明治 43) | 『岩手県郷土談話』 | 『東川村発達史』 北海道石狩 |
| | | 『遠野小誌』 岩手 |
| 1911 (明治 44) | | 『有珠虻田史』 北海道後志 |
| | | 『庄内歴史』 山形 |
| | | 『会津日史』 福島 |
| | | 『安達郡誌』 福島 |
| 「関東地方」 | | |
| 1891 (明治 24) | | 『上総国長柄郡茂原町誌』 千葉 |
| 1892 (明治 25) | 『東京府郷土史談』 (東書) | 『鹿島郡史談』 茨城 |
| | 『東京府史談』 (東書) | |
| 1893 (明治 26) | 『下野志』 上・下初版 栃木 | |
| | 『上野国史談』 群馬 | |
| 1894 (明治 27) | 『埼玉県史談』 生徒用 (東書・国研) | |
| | 『千葉県史談』 生徒用 (東書・国研) | |
| | 『東京府郷土誌』 (国研) | |
| | 『小学校生徒用上野史談』 (東書・国研) | |
| 1895 (明治 28) | 『上野国史談』 米田勝之助 (東書) | 『埼玉県北埼玉郡郷土史談』 |
| | 『歴史科生徒用小学上野志』 初版 | 『三浦郡生徒用史談』 神奈川 |
| | (東書・国研) | (神奈川県図) |
| | 『小学校生徒用上野史談』 (東書・国研) | |
| | 『小学校生徒用上野史談』 | |
| | 『小学下野誌』 (国研) | |
| 1896 (明治 29) | 『郷土地理歴史講義録』 茨城 | 『埼玉県入間郡地誌史談』 甲 |
| | | (教師用) 乙 (生徒用) (国研) |
| 1897 (明治 30) | | 『那珂郡沿革誌』 茨城 |
| | | 『下妻史談』 茨城真壁郡 |
| 1898 (明治 31) | | |
| 1899 (明治 32) | 『新撰東京府郷土誌』 3 版 (国研) | 『横須賀町三浦郡神奈川県 |
| | | 地誌史談』 (神奈川県図) |
| 1901 (明治 34) | 『郷土誌』 折原佐助 群馬 (国研) | |
| 1902 (明治 35) | 『埼玉県地理歴史』 (国研) | |

| | | |
|--------------|--------------|--------------|
| 1903 (明治 36) | 『東京郷土地誌遠足の友』 | |
| 1905 (明治 38) | | 『香取郡郷土小誌』 千葉 |
| 1910 (明治 43) | | 『北豊島郡史概説』 東京 |

2 北海道地方の郷土史教科書

北海道の郷土史教科書は、生徒用 1 種と教師用 9 種の発行が確認できる。生徒用の『北海道史談』は東書文庫本・国研本があり、函館市中央図書館デジタルアーカイブで内容を確認できた。本文 31 丁の内容は、「第 1 章 地理 第 2 章 往古蝦夷の叛服 第 3 章 渡党 第 4 章 武田信広 第 5 章 シヤ・シヤ・イフ 沙貝沙允の壘 第 6 章 国後騒乱 第 7 章 最上常矩 第 8 章 近藤宇重 第 9 章 間宮倫宗 第 10 章 高田屋嘉兵衛 第 11 章 エト・ロフ がいこう 択捉の外寇 第 12 章 種痘術 第 13 章 函館開港 第 14 章 福山城 第 15 章 洋式船の製造 第 16 章 五稜郭と弁天砲台 第 17 章 開拓の話 第 18 章 函館の役 第 19 章 樺太「クリル」の交換 第 20 章 開拓の違夢」である。著者村尾元永は、江戸時代の蝦夷地の動向を詳述しており、蝦夷地の探検家や幕末期の道南地域の史実を郷土史として教えようとしている。アイヌ民族に関する記述は、古代では中央の朝廷への不服従や叛乱を書き込んでいる。函館や松前周辺を中心とする北海道郷土史となっている。

国会図書館のデジタルライブラリー本は、すべて郡市レベルの郷土史であり、郡市町村の郷土史教科書である。日高国の沙流郡と千島の郷土史の 2 書が 1892 (明治 25) 年で古く、後志国岩内郡・古宇郡がこれに続く⁴。札幌と函館は「沿革史」の名称で刊行されて、上川は「発達史」としている。『札幌沿革史』1897 (明治 30) 年は、「地理→維新前→開拓使時代→県政時代→道庁時代→現況→札幌→近村の沿革」という内容であり、『函館沿革史』は 1899 (明治 32) 年に刊行された。旭川を含む上川地方の『上川発達史』は 1903 (明治 36) 年の刊行で、「第 1 編 総論 1 北海道略誌 2 上川 3 上川沿革 第 2 編 各村誌」として、第 1 編で北海道の略史を、第 2 編で上川地方の各村誌を略述している。

『上富良野志』(笹森敬緒編) 1909 (明治 42) 年は、序文で「上富良野尋常高等小学校長・下富良野尋常高等小学校長の協力で編纂」したとあって、「第 1 編 沿革 1 発端 2 村治 3 教育 4 衛生 5 社寺 6 農事 7 商業 (以下略)」の構成で教師用として発行している。『有珠虻田史』1911 (明治 44) 年は、胆振国有珠郡と虻田郡の郷土史である。当初「伊達村史」としていたが、途中から有珠・虻田両郡の発達

⁴ 北海道の国名・郡名・町村名のふりがなは、「北海道大小区画沿革表」(開拓使編纂『北海道志』巻 1 1885 (明治 17) 年) 19~31 丁に拠る。

史に題名を変更し、^{わたりはん}亙理藩移住の遠因・近因、北海道開拓、拓殖の成績などを記述して、各村の沿革、古蹟名勝、統計を掲げている。表2にはあげていないが、1911（明治44）年には、『札幌区史』と『函館区史』が刊行されており、両書とも石器時代から始まり、^{あんどう}安東氏、松前氏から江戸幕府の直轄時代、藩政時代の変遷、明治維新後の開拓使から道庁時代の沿革を描いている。明確に考古学から始まる郷土史を叙述している⁵。

表2 北海道地方の郷土史教科書

A 生徒用 B 教師用（教授用） C 学習帖他（以下の表も同じ）

| | | | | | | |
|----|-------------------------------|----------------------------|-----------|-------------|-------------|-----------------------|
| 1 | 『日高郡志料 沙流郡之部』 | ^{みこしほごいおひ} 御子柴五百彦 | 同左 | 30 頁 | 1892（明治25）年 | B |
| 2 | 『我千島』 | 百足昇 五城楼 | 61 頁 | 1892（明治25）年 | B | |
| | 第1章 地理 | 第2章 歴史—上古史、近世史 | 第3章 千島の状態 | 第4章 千島方策 | | |
| 3 | 『 ^{いわないふるう} 岩内古宇二郡誌』 | 桂源五郎 | 同左 | 159 頁 | 1894（明治27）年 | B 後志国 |
| 4 | 『北海道史談』 | 村尾元長著 | 東京・集英堂 | 31 丁 | 1895（明治28）年 | A （東書・国研・函館市中央図書館） |
| 5 | 『札幌沿革史』 | 札幌史学会 | 永田方正 | 256 頁 | 1897（明治30）年 | B |
| 6 | 『函館沿革史』 | 福岡竹次郎・佐藤広吉 | 旭堂 | 292 頁 | 1899（明治32）年 | B |
| 7 | 『上川発達史』 | 鈴木規矩男 | 上条虎之甫 | 296 頁 | 1903（明治36）年 | B |
| 8 | 『上富良野志』 | 笹森敬緒 | 上川管内志編纂会 | 191 頁 | 1909（明治42）年 | B |
| 9 | 『東川村発達史』 | 藤崎常次郎 | 上条虎之甫 | 91 頁 | 1910（明治43）年 | B ＊石狩国上川郡 |
| 10 | 『有珠虻田史』 | 大内古城 | 猪狩清右衛門 | 127 頁 | 1911（明治44）年 | B |

3 東北地方の郷土史教科書

東北地方の郷土史教科書の発行は、表3のように府県（旧国）レベルの生徒用が6県全県で確認できる。教師用・生徒用の郡市町村レベルも6県すべてで確認できる。東北地方では県名を冠した郷土史教科書は、「郷土史談・郷土地理歴史・郷土小史・郷土談話・郷土史話・郷土史略・郷土地史談」と銘打って生徒用・教師用とも多様なタイトル名で発行されている。名称が多様なように、内容も多種多様な郷土史教科書があり、これらは青森県、岩手県、宮城県、秋田県、山形県、福島県で確認できる。

⁵ 開拓使編纂『北海道志』巻1「総叙建置沿革附表」、巻2「地理 疆域形勢図説城他」 1885（明治17）年。

府県レベル・郡市町村レベルと生徒用・教師用の区分を見ていくと、青森県は府県1種・郡市2種（東津軽郡・津軽深浦）で生徒用1・教師用2であり、岩手県は府県4種・郡市2種（遠野2）で生徒用1・教師用5であり、宮城県は府県2種・郡市2種（牡鹿郡・柴田郡）で生徒用2・教師用2であり、秋田県は府県5種・郡市2種（由利郡・鹿角郡）で生徒用4・教師用3であり、山形県は府県1種・郡市6種（米沢・庄内3・東置賜郡・最上郡）で生徒用3・教師用4であり、福島県は府県4種・郡市3種（田村郡・安達郡・会津）で生徒用4・教師用3である。府県レベルでは、岩手4種、秋田5種、福島4種の3県の発行が多く、郡市レベルでは山形県が6種と一番多い。

東北地方の東書文庫本としては、府県レベルで『宮城県史談』『秋田県小史』『小学教科秋田県史話』『福島県史談』が確認できる。また国研本では、国会図書館デジタル本や東書文庫本には無い『小学史話』（宮城^{おしか}牡鹿郡）『小学教科秋田県地理歴史』『小学校用福島県地理歴史』『山形県史談』の発行が確認できた⁶。

青森県では、生徒用の『青森県史談』（山内元八著）は1895（明治28）年に初版が発行されており、デジタルライブラリー本は翌年の訂正再版である。同書の緒言には、県下高等小学校初学年に郷土史談を授けて本邦歴史を学ぶ準備として、愛国思想の養成のために郷土史を教えるとしている。「郷土といへるは、単に児童の居住する土地即我県下のみの^{いい}謂にあらずして、児童生活の境界をも併称するものなり。故に本書巻首に予備として、児童の境遇に適する所の一家のこと、学校のことなどを説き、次に我県各地の沿革を記し、巻末に於ては我本国に及びて、以て児童をして^{つと}夙に愛国の思想を發起せしめんことに^{つと}務めたり」。また、「学校の沿革、教師の交代^{ならび}に学校の為に尽力せし人々の来歴などは各地各校によりて教授すべきものなれば、別に一定の課程を設けず。故に本書予備として学校の話^をを教ふる際、適宜各校に於きて各自に課程を定めてこれを授くべし」と述べ、文語体だが児童に親近感を持たせる工夫をしたと述べている。『青森県史談』の本文は、次のとおりである。

第1章 予備—家族の話 学校の話 役所の話 産業の話 兵隊の話

第2章 各地方沿革—青森町及其の近傍の話 弘前市及其の近傍の話 黒石町及其の近傍の話 木造^{きづくり}町及其の近傍の話 八戸^{はちのへ}町及其の近傍の話 三戸^{さんのへ}町及其の近傍の話 七戸村及其の近傍の話 田名部^{たなぶ}村及其の近傍の話

第3章 日本の国柄—今上天皇陛下の御盛徳及御先祖の御話 国名国旗の話 我
国柄の世界に類なき話

身近な家族や学校の話から郷土の話へ、次に県内の郡市町村史を概観して、最後に天皇中心の日本への国家愛を育む愛国思想を強調した歴史を教えようとした。

⁶ 床井弘・斎藤時泰輯録 榊原芳野訂正『日本地誌略物産弁』巻2 東山道北陸道 1880（明治13）年 雄風舎蔵版 東北地方の郡市町村の沿革、物産、地名は同書に拠る。

岩手県では、明治 20 年代には郷土史教科書の発行が見られず、県最初の郷土史は生徒用の『岩手県郷土史』1897（明治 30）年である。明治 30 年代から 40 年代の岩手の郷土史は生徒用 1・教師用 4 である。府県レベルは『岩手県史談』1899（明治 32）年、『岩手県史』1908（明治 41）年、『岩手県郷土談話』1910（明治 43）年の 3 種で、郡市レベルは『遠野史談』1903（明治 36）年と『遠野小誌』1910（明治 43）年の遠野地方 2 種が発行された。

生徒用『岩手県郷土史』（一戸隆次郎編）は、序言に「県史郡史を略叙し、次に旧蹟・古刹・偉人・義士等の縁起略歴を記し、専ら其の地方に連絡せる事実を選ぶ」と書き、また「何れの郡を問はず、学校所在地の記事を先にして逐次他郡史に及ばんことを要す」と生徒に身近な学校周辺の史実から入り、次第に郡史に進めて行くようにと述べている。内容は「岩手県の地勢及び沿革」を、「磐手郡及び盛岡市史 紫波郡史 稗貫郡史 和賀郡史 膽沢郡史 江刺郡史 東西磐井郡史 気仙郡史 上下閉伊郡史 九戸郡史 二戸郡史」の順序で教えるべきとした。

教師用の『岩手県史談』は、編纂にあたり小學校生徒に「本県歴史の大要を授くるに当たり、教師に談話の材料を与へんとするにあり」として、総説から「第 1 編 市及び各郡史（盛岡市から各郡へ）、第 2 編 歴代史」の順に教えるとした。『岩手県史』1908（明治 41）年は、岩手県教育会編纂で岩手県師範学校長・教諭、高等女学校教諭が岩手県の沿革と地理を執筆したものであった。「1 古代 2 奈良朝時代 3 平安朝時代 4 鎌倉時代 5 南北朝時代 6 足利時代 7 織豊時代 8 徳川時代 9 現代」としており、時代区分も現在とほぼ変わらない区分をとっている。

宮城県では、生徒用として『宮城県史談』1892（明治 25）年と『小学史話』牡鹿郡教育会編 1895（明治 28）年が発行されており、前者は東書文庫本で後者は国研本で確認できる。教師用には『柴田郡誌』柴田郡教育会編 1903（明治 36）年と『宮城県繁栄誌』1909（明治 42）年がある。『宮城県繁栄誌』は、前半部は県内の地誌の叙述で、後半部は仙台市から始まり「宮城郡、名取郡、荊田郡、柴田郡、伊具郡、亙理郡、黒川郡、加美郡、志田郡、玉造郡、遠田郡、栗原郡、登米郡、桃生郡、牡鹿郡、本吉郡」の各郡誌を詳述している。また、宮城県では 1911（明治 44）年に『石巻案内』、『気仙沼案内』、『仙台市案内』の郷土案内本が 3 冊刊行されている。

秋田県は、東北地方では生徒用の郷土史教科書の発行が、最も多数確認できる県である。1893（明治 26）年初版発行の『秋田県小史』生徒用（狩野徳蔵編）、『小学教科秋田県史話』（笈川栄助編）、『新撰秋田県史談』（菅田義英編）の 3 種が確認できる。前 2 者は翌年 1894（明治 27）年に訂正再版が出ており、デジタルライブラリー本は再版本である。『秋田県小史』と『小学教科秋田県史話』は東書文庫本である。

『秋田県小学史略』上・下 教師用（狩野徳蔵編）は、1893（明治 26）年発行で「本

書ハ余カ編纂セル『秋田県小史』ヲ授クル時ニ方リテ 教師ノ訓晦ヲ助ケル為ニ其ノ理由ヲ詳カニシ 猶二・三ノ事蹟ヲ増加セルモノナリ」と述べて、『秋田県小史』の内容を詳述している。狩野徳蔵は、序言で「務メテ其字句ヲ簡易ニシ難渋ノ語ヲ省キ明瞭シ易カラシメタリ」と述べ、「本書ノ体裁ハ編年体ニアラス 紀事本末体ニアラス 紀伝体ニ似ルトモ未タ全ク然ラス 其部ヲ分ケ類ニ従ヘシハ生徒ヲシテ其部類ヲ知り記誦シ易カラシメス為ナリ」と説明している。内容構成は、上巻で「第1編 歴史沿革 第2編 神社 第3編 仏閣 第4編 名所旧蹟」、下巻で「第5編 人物 第6編 旧秋田藩ノ制度 第7編 古今戦闘ノ概要」としている。

生徒用の『新撰秋田県史談』（菅田義英編）は、狩野徳蔵の校閲を受けており、第一段で「学校沿革談ヲ始メトシ町村功勞者、神社仏閣、名所古蹟」から入り、第二段で「一国若クハ一県ニ属スル事歴ノ変遷」に進めていくと述べている。郷土史の構成は次のようである。「1 羽後の国一太古ヨリ慶応4年戊辰年 2 戊辰の役より現時 3 佐竹家の略系 4 一族事歴 5 秋田実季の略伝 6 秋田城 7 佐竹家支封の略系 8 六郷家の略系 9 生駒家の略系 10 仁賀保家の略系 11 岩城家の略系 12 南部家の略系」

郷土史談の最初を学校の沿革から始めて、町村の功勞者や地域の神社仏閣、名所旧蹟の由来を教えている。羽後国の歴史を統治者中心に構成して人物史や家系を教えているが、生徒の関心と興味を引き付けられるかに疑問が残る。

秋田県の郡市レベルの郷土史は、生徒用で『由利郡地誌』と教師用で『鹿角志』がある。後者は鹿角郡史の始まりを石器土器の考古学の成果から始める郷土史であった。『秋田県史』上古部・中古部の2冊が1908～09（明治41～42）年に刊行されているが、これは大正期の本格的な県史編纂・刊行の先駆けをなすものであった。

山形県では、生徒用の県レベル郷土史は『山形県史談』1894（明治27）年の国研本である。同書は県内の郡市レベルの郷土史に引用されている。同書は巻頭の凡例で、「郷土史談ハ地理ニ附帯シテ教授スルヲ便ナリトス」「県庁所在地ヲ本トシテ紀行体ノ順序ニ由レリ」と述べ、県下の城館の沿革、社寺の縁起を適宜選んだとする。「第1章 総論 第1節 地理 第2節 出羽国ノ由来 第3節 沿革 第2章 最上地方 第4節 沿革 第5節 山形 第6節 上山 第7節 天童 第8節 寒河江 第9節 榎岡 第10節 新庄 第3章 庄内地方 第11節 沿革 第12節 酒田 第13節 鶴岡 第14節 藤島 第4章 置賜地方 第15節 沿革 第16節 宮 第17節 米沢 第18節 高畑 第5章 附説 第19節 藩制及ビ風俗 第20節 教育（以下略）」という構成であり、最上地方、庄内地方、置賜地方の沿革を略述して、第5章以下では藩制から明治維新後の変遷を概観している。

山形県の郷土史では郡市レベル6種が発行されて、東北地方の他県とはやや異なり

県内地方ごとの独自性を学ばせようとする傾向がある。郡市レベルでは『米沢史談』1892（明治25）年と『郷土地理歴史』（東置賜郡洲島尋常高等小学校編）1896（明治29）年の2種に加えて、庄内地方の郷土史で3種の教科書の発行が確認できた。洲島尋常高等小学校『郷土地理歴史』は、『山形県史談』と『米沢史談』の2書を典拠にしたと明記している。次に、教師用の『庄内史』（藤島豊編）1893（明治26）年を見ておこう。同書は1冊本だが、上・下巻に分けて編成して、上巻を庄内地方の通史にあてている。「1 考古学上ニ於ケル庄内 2 蝦夷人ノ住居トシテノ庄内 3 和銅時代 4 寛治時代 5 鎌倉時代 6 大宝寺屋敷 7 川北ノ放逐 8 武藤氏 9 上杉氏 10 最上氏 11 酒井氏 12 延宝時代 13 享保時代 14 文化時代 15 天保時代 16 戊辰之乱 17 明治維新」としている。同書で興味深いのは、考古学の知見から歴史を書き始めている点と、中世から近世では郷土の統治者中心の歴史とし、近世では時代順の沿革史としている点である。編者藤島は、庄内地方の考古学から書き始めて、先住のアイヌ民族の居住地域であったことを述べ、奈良—平安—鎌倉—室町—戦国の郷土史を時代史に即して説明している。明治20年代の考古学、民族学、民俗学の成果を押さえながら郷土史を編纂している点で、この時期には数少ないユニークな郷土史教科書である。

『庄内歴史』（野村敏恵・田村源吉共著）1911（明治44）年も、アイヌ民族の先住性の事実を踏まえて叙述しているが、明治40年代になると「蝦夷人位置ノ状況」のあとは「蝦夷人征伐」と書かれていき、蝦夷人征服＝アイヌ民族の抑圧と蔑視の思想が反映されている。大和朝廷による先住民の蝦夷征服が、天皇制国家による支配の正当性の主張が協調されている。

東置賜郡の須崎尋常高等小学校『郷土地理歴史』は、明治10年代の郷土地誌教科書によく見られた内容構成となっている。当時の直観主義的教育方法の影響を受けた地理教育の教科書で、最初に教室内の位置・方角・距離・面積・地図から始めて、次に学校内の校舎・図面に及んでいく形式である。「本書ハ『山形県新地誌』・『山形県史談』・『米沢史談』ニ依ル」と出典を書いている。同書は「第1章 教室一位置・方角・距離・面積・図 第2章 学校一校内模様・沿革・図 第3章 学校近傍（略） 第4章 吉島村 第5章 東置賜郡 第6章 米沢地方 第7章 山形県」の構成となっている。明治20年代後半のこの時期には、地理学の概念から教え始めることは珍しくなっており、明治10年代の教授法を引き継いでいる教科書である。

福島県では、『福島県郷土史談』『福島県地史談』『福島県史談』生徒用の3種類の県レベルの生徒用郷土史が確認できる。うち前2種がデジタルライブラリー本で、後者1種が東書文庫本である。郡市レベルの3種はいずれも教師用であり、田村郡・足立郡及び会津地方5郡（南北会津郡・大沼郡・河沼郡・耶麻郡）の郷土史である。東書

文庫本の『福島県史談』生徒用は、宗宮信行・木口弘記共著で東京・普及舎から 1893（明治 26）年に発行された。1894（明治 27）年の訂正再版本もある。ところで、同著の編者宗宮信行は、滋賀県で『近江史談』を編纂し、のち岐阜県教育会に移り『岐阜県史談』編纂にあたった人物である。彼のような明治 20～30 年代の郷土史教科書の執筆者や編者の分布や人脈について、現段階では全国でもほとんど調査がされておらず、今後各府県師範学校や教育会などの研究を進めて行く必要がある。

次に、『福島県郷土史談』1894（明治 27）年訂正再版と『福島県地史談』1896（明治 29）年を検討していく。『福島県郷土史談』（小菅松内編）は初版 1893（明治 26）年で、歴史科初歩用に編纂し、「城跡・旧跡・神社・仏閣等ヲ基礎トスル所ノ考古学ヲ避ケ、年代ヲ経トシテ古今事歴ノ大要ヲ掲ゲタリ」と述べている。続けて「学校所在地ノ史談ヲ授クルノ傍、本書ヲ授クルハ元ヨリ適当ノ順序ナリト雖、本書ヲ授ケツツ学校近地ニ関スル所ニ一層ノ詳細ヲ加ヘ、或ハ更ニ添補スルモ亦一ノ良法ナリ」と、学校所在地がある地域の歴史を詳しく教えるとした。

第 1 章 総説一歳月・世の変化・大名・国守・將軍

第 2 章 上古一我等の祖先・始めて皇沢に浴す・国名・蝦夷^{えぞ}の叛乱・田村麻呂・上古の人

第 3 章 中古一八幡太郎・大島城・阿都賀志山・搦山^{からめやま}・雲水峰

第 4 章 近古一戦乱の世・高野郡・四本松・宮森城・権現谷地・麿上原・須賀川城・民の疾苦^{しつく}・氏郷

第 5 章 諸城一若松城・白河城・其他の諸城

第 6 章 維新の前後一政治・風俗・戊辰の役 1・2・3

第 7 章 明治の御代一領地の奉還・学校・御巡幸^{ごじゅんこう}・心得

同書は、他府県の郷土史談に比べて活字も大きく、読みやすい工夫がされている。内容は郷土の史実を丁寧に描いており、戊辰戦争に関する史実を詳細に記述して郷土人の誇りを伝える思いを込めている。

『福島県地史談』（海野文蔵編）1896（明治 29）年は、編者も発行所も安達郡二本松町^{あだちぐんにはんまつちよう}である。序言に「諸子ハ学校近傍ノ地誌歴史ヲ修了シテ 尚進ンテ県内地誌歴史ヲモ聴カンコトヲ願フ」と記して、「総説 安達郡 信夫郡 伊達郡 相馬郡 雙葉郡 石城郡 東白河郡 西白河郡 岩瀬郡 石川郡 田村郡 安積郡 北会津郡 南会津郡 大沼郡 河沼郡 耶麻郡^{やま}」の順に、岩代国各郡の地理歴史を教える構成である。

福島県では会津地方が郷土史編纂に最も熱心で、一般向けで『会津史』巻 1～10 の 5 巻本が 1895～97（明治 28～30）年に刊行され、また『新編会津風土記』巻 1～47 の 13 巻本が、1893～1901（明治 26～34）年に刊行されている。教師用『会津日史』もこの潮流のなかで発行された。戊辰戦争後四半世紀がたって歴史を振り返り、辛酸の歴

史を子孫に伝えようという郷土意識の高まりが郷土史書の刊行を促したと考えられる。

宮城県に見られた各地域の郷土案内本は、福島県でも1908（明治41）年に発行されている。表4に掲載しなかったが、『信夫郡案内』、『福島県案内』、『南会津郡案内誌』の3種が確認でき、奥羽6県連合共進会や南会津郡農会の開催に併せて刊行されている。九州地方の案内記や東北地方の案内物の刊行が隆盛したのは、明治末年に全国に鉄道網が普及した影響が大きかった。全国的なネットワークができて中央と地方との交流、地方同士の人的物的交流が盛んになって、案内記の形で郷土の地理歴史を紹介しあう必要性が生まれてきたからである。

表3 東北地方の郷土史教科書

| | |
|-------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| ＜青森県＞ | |
| 1 | 『油川沿革史』 大瀬熊三郎 同左 101頁+附録49頁 1892（明治25）年 B * 著者は東津軽郡 ^{あさむし} 浅虫尋常高等小学校長に6年前招聘され、浅虫村の沿革史を編集 地理 第1紀 無史時代 第2紀 大同年間～応仁年間 第3紀 文明年間～天正13年 第4紀 天正14年～寛永3年 第5紀 寛永4年～天明3年 第6紀 天明4年～明治3年 第7紀 明治4年～24年 |
| 2 | 『青森県史談』 山内元八 普及舎 37丁+年表 1896（明治29）年訂正再版 A 初版1895（明治28）年 |
| 3 | 『陸奥津軽深浦沿革誌』 海浦義観 同左 44頁 1898（明治31）年 B |
| ＜岩手県＞ | |
| 1 | 『岩手県郷土史』 一戸隆次郎 古川半七 88頁 1897（明治30）年 A |
| 2 | 『岩手県史談』 志村義玄 鶴鳴閣 80頁 1899（明治32）年 B |
| 3 | 『遠野史談』 八戸宣民 鈴木吉十郎 19丁+附録6丁 1903（明治36）年 B |
| 4 | 『岩手県史』 岩手県教育会 246頁 1908（明治41）年 B |
| 5 | 『岩手県郷土談話』 岡山直機 山口活版所 288頁 1910（明治43）年 B |
| 6 | 『遠野小誌』 鈴木吉十郎 同左 95頁 1910（明治43）年 B |
| ＜宮城県＞ | |
| 1 | 『宮城県史談』 生徒用 宇野九八郎・四竈仁通 普及舎 1892（明治25）年 A（東書） |
| 2 | 『小学史話』 牡鹿郡教育会編 山口啓之助 9丁 1895（明治28）年 A（国研） |
| 3 | 『柴田郡誌』 柴田郡教育会 87頁 1903（明治36）年 B |
| 4 | 『宮城県繁栄誌』 浮世社 71頁 1909（明治42）年 B |
| ＜秋田県＞ | |
| 1 | 『秋田県小史』 生徒用 狩野徳蔵編 東京・吉川半七 1893（明治26）年初版 |

- 訂正再版 1894 (明治 27) 年 A(東書)
- 2 『小学教科秋田県史話』 笈川栄助編 東京・教育書房 1893 (明治 26) 年初版
訂正再版 1894 (明治 27) 年 A(東書・国研)
 - 3 『秋田県小学史略』 上・下 教師用 狩野徳蔵 金永堂 上 (25 丁) 下 (41 丁)
1893 (明治 26) 年 B
 - 4 『新撰秋田県史談』 誉田義英 秋穂堂 1894 (明治 27) 年 3 訂再版 A
 - 5 『由利郡地誌』 由利郡教育会 41 丁 1894 (明治 27) 年 A
 - 6 『^{かづの}鹿角志』 内藤訓 同左 147 丁 1907 (明治 40) 年 B *鹿角郡史
巻 1 年代 石器土器 巻 2 制度 巻 3 地理 巻 4 人物
 - 7 『小学教科秋田県地理歴史』 浅沼正毅編 横手町・鮮進堂 1897 (明治 30)
年 A(国研)

<山形県>

- 1 『米沢史談』 巻 1 麻績斐 知新堂 47 丁 1892 (明治 25) 年 A
- 2 『庄内略史』 東野政造 同左 25 丁 1893 (明治 26) 年 B
第 1 章 上世史 第 2 章 中世史 第 3 章 近世史—武藤氏、上杉氏、最
上氏、酒井氏
- 3 『庄内史』 藤島豊 誠信堂 254 頁+附録 26 頁 1893 (明治 26) 年 B
- 4 『山形県史談』 津田信吉・山本清一郎合著 33 丁 有斐堂 1894 (明治 27)
年 A(国研)
- 5 『郷土地理歴史』 東置賜郡洲島尋常高等小学校 知新堂 17 丁
1896 (明治 29) 年 A
- 6 『最上郡史』 松居秀房 192 頁 1908 (明治 41) 年 B
- 7 『庄内歴史』 野村敏恵・田村源吉 同左 195 頁+附録 11 頁 1911 (明治 44) 年 B

<福島県>

- 1 『福島県史談』 生徒用 宗宮信行・木口弘記 東京・普及舎 1893 (明治 26) 年
A(東書) 訂正再版 1894 (明治 27) 年(国研)
- 2 『福島県郷土史談』 小菅松内 教育書房 30 丁 1894 (明治 27) 年訂正再版 A
初版 1893 (明治 26) 年
- 3 『福島県地史談』 二本松・海野文蔵 同・沢田書店 17 丁 1896 (明治 29) 年 A
- 4 『小学校用福島県地理歴史教科書』 福島同窓会 同左 30 丁 1896 (明治 29)
年 A(国研)
- 5 『田村郡郷土史』 田村郡教育会 114 頁 1904 (明治 37) 年 B *三春町
1 総論 2 位置及幅員 3 地勢 4 境界 5~18 (中略) 19 町村
ノ沿革 20 所轄ノ沿革 21 貢租ノ沿革 22 藩政ノ偉業 23 文学

24 志士仁人

- 6 『会津日史』福島県教育会若松市部 鈴木屋書店 102 頁 1911 (明治 44) 年 B
会津 5 郡 (北会津郡・南会津郡・大沼郡・河沼郡・耶麻郡) の沿革史
- 7 『安達郡誌』安達郡教育会町村誌編纂 同郡役所 217 頁 1911 (明治 44) 年 B

4 関東地方の郷土史教科書

関東地方の郷土史教科書は、表 4 から府県 (旧国) レベル 17 種と郡市町レベル 11 種の計 28 種が確認できる。そのうち生徒用が 23 種、教師用が 5 種である。そのうち東京府は府県 5 種・郡市 1 種 (北豊島郡) で生徒用 5、神奈川県は郡市のみ 2 種 (三浦郡・横須賀) でいずれも生徒用、埼玉県は府県 2 種・郡市 3 種 (入間郡・埼玉郡 2) で生徒用 4・教員用 1、千葉県は府県 1 種・郡市 2 種 (長柄郡・香取郡) で生徒用 1・教師用 2、茨城県は府県 1 種・郡市 3 種 (那珂郡・鹿島郡・下妻) ですべてが生徒用、栃木県は府県の生徒用のみの 2 種で、群馬県は 6 種すべてが府県で生徒用 5・教員用 1 と確認できた。

表 4 の資料の出典は国立国会図書館デジタルライブラリーを主としているが、府県レベルの生徒用では『東京府史談』『千葉県史略』『郷土地理歴史講義録』(茨城)『下野誌略』等あり意外に少なかった⁷。関東地方の郷土史は、東書文庫本で『東京府郷土史談』『埼玉県史談生徒用』『千葉県史談』『上野国史談』『小学校生徒用上野史談』を確認できた。国研本には、国会本と東書文庫本に無かった『東京府郷土誌』『埼玉県地理歴史』『小学下野誌』『郷土誌』(群馬・折原佐助) の 4 種があり、東書文庫本にしかない生徒用郷土史は、東京府・埼玉県・千葉県各 1、群馬県 4 の 7 種があった。神奈川県は、神奈川県立図書館デジタルアーカイブで、『三浦郡生徒用史談』『横須賀町三浦郡神奈川県地誌史談』が確認でき、『三浦郡生徒用史談』は国研にも所蔵されていた⁸。

東京都は、郷土史にふれる前に沿革を概観しておく。東京府は 1868 (慶応 4) 年 7 月に成立するが、現在の千代田・中央・港・新宿・文京・台東・江東などの都心部地域のみであった。1871 (明治 4) 年 11 月の廃藩置県後にほぼ現在の東京 23 区の範囲が東京府となり、1878 (明治 11) 年 1 月に伊豆諸島を静岡県より編入、1880 (明治 13) 年 10 月に内務省より小笠原諸島を移管、1893 (明治 26) 年 4 月に神奈川県より三多摩地方を編入して東京府の領域が定まった。府の面積は一気に 3 倍近くになった。その後 1943 (昭和 18) 年の都制で、東京府は東京都となる。なお、東京市は 1889 (明治 22) 年 5 月の市制で誕生、のち隣接郡部を編入して 35 区になるが、都制により消滅した。

⁷ 同上 『同上書』巻 1 畿内東海道 1880 (明治 13) 年 雄風舎蔵版 関東地方の郡市町村の沿革、物産、地名は同書に拠る。

⁸ 『三浦郡生徒用史談』・『横須賀町三浦郡神奈川県地誌史談』(神奈川県立図書館 神奈川県デジタルアーカイブ「横須賀郷土資料叢書」)。

東京府の郷土史 3 種のうち、『東京府史談』（著者山崎彦八）1894（明治 27）年再版、1892（明治 25）年初版と『新撰東京府郷土誌』1899（明治 32）年を見ておく。後者の『新撰東京府郷土誌』は、郷土史より郷土地誌に重点を置いており、各郡地誌の沿革を「東京府 東京市 荏原郡 豊多摩郡 北豊多摩郡 南足立郡 南葛飾郡 北多摩郡 南多摩郡 西多摩郡 伊豆七島及び小笠原島」のように叙述している。

これに対して、三多摩地方編入前の発行の『東京府史談』は、序において「歴史ヲ研究センニハ先ツ自己ニ近接スルヨリ始メ」て、郷土の史談から自国の歴史へ、自国の歴史から外国の歴史へとすべきだと主張する。推薦者大東重善は、東京府下の歴史は其の書が少なく、小学校教科用の目的を持った書はさらに少ないと述べ、本著が「府下古今の沿革、府民の風俗、習慣、新規開発の事業、忠良賢哲の事蹟、その他文化の由来」を網羅した郷土史教科書と特徴づけている。小学生徒にとっては史実を網羅的に取りあげすぎている。

1 章 武蔵国号の起源 2 章 武蔵国はもと東山道たりし事 3 章 武蔵諸郡異同の事 4 章 武蔵野の形状 5 章 武蔵国の沿革 6 章 江戸の起源及沿革 7 章 江戸城創建及其沿革 8 章 江戸繁華の由来 9 章 遷都の理由 10 章 東京の地勢及繁華 11 章 霞が関 12 章 浅草寺 13 章 寛永寺 14 章 増上寺 15 章 愛宕神社 16 章 日枝神社 17 章 神田神社 18 章 湯島神社 19 章 靖国神社 20 章 深川神社 21 章 金刀比羅神社 22 章 平川神社 23 章 亀戸神社 24 章 氷川神社 25 章 渋谷八幡宮及金王丸の事 26 章 新田神社 27 章 徳川時代の職制 28 章 徳川時代の政略 29 章 江戸市政 30 章 江戸の交際 31 章 錦絵の起源 32 章 芝居の起源及其由来 33 章 人力車の発明 34 章 太田道灌 35 章 道灌山 36 章 上水 37 章 江戸の祭礼 38 章 隅田堤の桜 39 章 小金井の桜 40 章 不忍池の由来 41 章 隅田川都鳥のこと 42 章 梅若塚の由来 43 章 聖堂のこと 44 章 多摩川 45 章 井之頭弁財天の由来 46 章 神田於玉が池の由来 47 章 御殿山 48 章 東京の風俗 49 章 徳川家康 50 章 徳川家光 51 章 阿部忠秋 52 章 徳川吉宗 53 章 慶安の騒動 54 章 泉岳寺義士の墓 55 章 塙保己一 56 章 桜田の騒動 57 章 上野の戦争 58 章 府中神社 59 章 国分寺 60 章 武蔵国府の址 61 章 品川の砲台 62 章 祐天寺及び天上人 63 章 憲法発布及国会開設

東京府の郷土史として、1 章から 5 章までは武蔵国の沿革を説明して、6 章以降で江戸城創建から江戸幕府による建都、寺社、江戸時代の政治・経済・文化を詳細に語っている。56 章桜田門外の変から 57 章の上野戦争で戊辰戦争にふれているが、明治維新の諸改革は書かれておらず、明治以降は極めて簡略化している。

『東京郷土地誌 遠足の友』（宮部治郎吉・高橋友夫）1903（明治 36）年は、郷土

史教科書というより郷土地理・歴史の学習書であり、校外学習・遠足のために、生徒の遠足紀行文、遠足の場所地などを集めた事例集である。明治30年代後半には、こうした郷土の現地見学の手引書が、旅行体記述の郷土史と並んで刊行された。

1 主要なる遠足方面における紀行文、2 生徒自作の紀行文、3 各区各郡によって名所旧跡その他参考、4 物産・会社・病院・学校・官衙の重要事項、宮城めぐり→上野公園→小石川めぐり→船旅行→荏原めぐり→小金井の桜見→鉄道旅行→九段の公園→植物園に遊ぶ・穴守に遊ぶ・堀切の菖蒲を見る・大宮公園に遊ぶ

埼玉県では、郡市レベルの生徒用として、北埼玉郡と入間郡の2郡の教科書がある。埼玉県入間郡小学教員講習会が編纂した『埼玉県入間郡地誌史談』甲（教師用）と乙（生徒用）は、教師用と生徒用をセットにして1896（明治29）年に刊行したものである。乙（生徒用）は本文12丁+表4丁で、甲（教師用）本文66頁にくらべて簡潔であった。甲（教師用）の序文には、郷土史を教える目的と方法を書いている。

「地理ハ国家形体ニシテ、歴史ハ国家ノ精霊ナリ、故ニ本篇ハ地誌史談教案用トシテ編纂セシモノナリト雖モ、小学生ヲシテ愛国心ヲ発達シ道德思想ヲ修養セシメンニハ、尋常・高等ヲ論ゼズ教授ノ際、便宜ノ材料ニ此書持タラバ千里跨歩ニ起ル理ニ副ハンカ」、郷土史では「生徒ノ記憶ヲ明瞭ニシ」教えるものとした。郷土史は、国家への愛国心の育成の手段で、道德思想を涵養するためとしている。郷土史の史実は、町村ごとに特有の内容を説明して、最後に入間郡全体の史談を扱う形式である。

第1 総説 第2 川越町及其近傍 第3 大井村及び其近傍 第4 入間川町及其近傍 第5 所沢町及其近傍 第6 豊岡町及其近傍 第7 飯能町及其近傍 第8 越生町及び其近傍 第9 坂戸町及其近傍 第10 入間郡地誌史談一覧表

『埼玉県北埼玉郡郷土史談』は、北埼玉郡教員講習会編集で1895（明治28）年に発行された。郷土史談をテーマ別にして、沿革・旧跡・神社仏閣・古墳・利根川流域・戦争の6章構成の編成であった。序に『埼玉県北埼玉郡郷土地誌』と同時発行されたとある。

第1章 沿革 1課 武蔵国 2課 埼玉県 3課 埼玉郡、第2章 旧跡 4課（欠） 5課 羽生城址 6課 騎西城址 7課 小崎沼 8課 埼玉村近傍の古墳 9課 石田堤 第3章 神社仏閣 10～20課（略） 第4章 古墳 21課 御廟塚 22課 足利持氏父子の墓 23課 可児氏の墓 24課 河原兄弟の碑 25課 木戸忠朝の墓 利根川流域の変化 附用水の新設 26課 第6章 戦争 27課 忍城の戦其1 28課 忍城の戦 其2

千葉県では、1881（明治14）年に『千葉県史略』（著者山田吉見）が発行されており、明治20年代以降では東書文庫本の『千葉県史談』生徒用（斎藤寛次郎編）1894（明治27）年の発行が確認できる。同年発行の斎藤著『千葉県郷土地誌』はデジタル

ライブラリー本にあるが、『千葉県史談』は無かった。千葉県の教師用では長柄郡茂原町^{ながら もばら}と香取郡^{かとり}の2種が確認できる。後者の『香取郡郷土小誌』1905（明治38）年発行本は、佐原小学校長・栗原小学校長他の協力を得て編纂できたと編者岩堀角次郎は述べている。内容は、最初に位置・地勢・町村・名邑・社寺を書き、沿革を36章構成で書いている。香取郡郷土史の沿革は、香取郡の郡称や香取大神から始めて、「平将門^{たいらのまさかど}の叛^{ただ}、忠常^{つね}の乱、千葉氏、千田氏、東氏、国分氏等の武士団を説明し、古今集伝授と東常緑^{こきんしゅうでんじゅ}の和歌、千葉市の興隆と滅亡、徳川時代の分封」から、幕府時代の伊能忠敬^{いのおほらゆうけい}、大原幽学、廃藩置県から市町村制に及び最後は「征露奉幣勅使^{せいろうほうへい}」で終わっている。

茨城県では、県レベルで1種、郡市レベルで3種（鹿島郡、那賀郡、真壁郡下妻）が確認できる。県レベルの『郷土地理歴史講義録』（著者高橋正賢）は、題名は講義録としているが、生徒用で郷土地理7丁+郷土歴史12丁の構成である。同書は1895（明治28）年初版で、「1 昔の郷土 2 関東ノ乱 3 豊田氏 4 多賀谷氏^{たがや} 5 小田氏ノ滅亡 6 豊田氏ノ滅亡 7 石毛人ノ善戦 8 多賀谷滅亡 9 常陸谷原ノ開墾 10 開墾後 11 飯沼新田・吉田新田 12 江連用水 13 維新後 14 学校 15（人物史）」の内容である。

生徒用の『鹿島郡史談』（下生成安編）1892（明治25）年は、編者が鹿島第一高等小学校生徒に口授した内容で、鹿島郡の郷土史の詳細な記述である。

第1 鹿島郡名ノ起源 第2 鹿島郡郷村ノ異同 第3 鹿島郡ノ沿革 第4 鹿島神宮^{かしまじんぐう} 第5 武甕雷神ノ勲勞^{たけみかいかづちかみ} 第6 鹿島大祭 第7 神社 第8 藤原鎌足 第9 寺院 第10 新当流 第11 塚原卜伝^{つかはらぼくでん} 第12 鹿島立 第13 倭舞^{みろく} 第14 弥勒跡 第15 名所旧跡 第16 故城跡 第17 鹿島文庫 第18 教育一家 第19 波崎縮 第20 柳川新

群馬県では、県レベルの6種中5種が上野国^{こうづけ}を冠した郷土史である。生徒用も5種と多い。『上野国史談』（大塚浩編）1893（明治26）年と『上野国史談』（米田勝之助編）1895（明治28）年は、同じ書名で発行されている。『小学校生徒用上野史談』（著者堤辰二）は、教師用も同じ1895（明治28）年に刊行されており、『歴史科生徒用小学上野史』（著者岩上正^{まさし}）は明治30年代の発行本である。群馬県の郷土史教科書は、東書文庫本5種で、国研本1種が確認できた。

栃木県では、群馬県同様に旧国名^{しもつけ}の下野国を冠した2種の郷土史教科書がある。生徒用『下野志』上・下1894（明治27）年再版本は、初版1893（明治26）年である。「本書ハ小学校ニ於テ町村ノ地理及ヒ史談ヲ学ビ終リタル児童ニ課スルヲ目的トス」として、郷土の地理・史談を郡ごとに説明している。「第1 総緒論 第2 各郡志 河内郡 上都賀郡^{はが} 芳賀郡 下都賀郡 塩屋郡 那須郡 安蘇郡 足利梁田郡^{やなだ} 第3 総論」の構成で、総緒論5丁、各郡史10丁をあてて、総論で重要な人物と事蹟に関する史談

を入れている。

神奈川県では、『三浦郡生徒用史談』1895（明治 27）年及び『横須賀町三浦郡神奈川県地誌史談』1899（明治 32）年の郷土史が確認される。

表 4 関東地方の郷土史教科書

| | |
|---------------------------------------|-------------------------------------------------------------------|
| ＜東京都＞ | |
| 1 | 『東京府史談』 山崎彦八著 博文館 51 丁 1892（明治 25）年 訂正 3 版 1894（明治 27）年 A |
| 2 | 『東京府郷土史談』 岡本竹二郎編 広岡麟之助 1892（明治 25）年 A（東書） |
| 3 | 『東京府郷土誌』 北條亮 有正館 1894（明治 27）年 A（国研） |
| 4 | 『新撰東京府郷土誌』 教育研究会 東京図書出版社 42 丁 1899（明治 32） 年 A（国研） |
| 5 | 『東京郷土地誌遠足の友』 宮部治郎吉・高橋友夫 金昌堂 1903（明治 36）年 C |
| 6 | 『北豊島郡史概説』 北豊島郡教育会 110 頁 1910（明治 43）年 B |
| ＜神奈川県＞ | |
| 1 | 『三浦郡生徒用史談』 三浦郡教育会編 13 丁 1895（明治 28）年 A（国研） —1896 年本 |
| 2 | 『横須賀町三浦郡神奈川県地誌史談』 竹川新四郎編 同左 1899（明治 32） 年 A |
| *1・2—神奈川県立図書館神奈川県デジタルアーカイブ「横須賀郷土資料叢書」 | |
| ＜埼玉県＞ | |
| 1 | 『埼玉県史談』 生徒用 須永和三郎編 普及舎 1894（明治 27）年 A 訂正 再版（東書・国研） |
| 2 | 『埼玉県入間郡地誌史談』 甲（教師用） 埼玉県入間郡小学教員講習会 本文 66 頁+表 7 頁 1896（明治 29）年 B |
| 3 | 『埼玉県入間郡地誌史談』 乙（生徒用） 同 本文 12 丁+表 4 丁 1896（明治 29）年 A（国研） |
| 4 | 『埼玉県北埼玉郡郷土史談』 埼玉県北埼玉郡教員講習会 尚古堂 26 頁 1895（明治 28）年 A |
| 5 | 『埼玉県地理歴史』 黒沢省吾・相島亀三郎編 志村半次郎校訂 高野幸吉 25 丁 1902（明治 35）年 A（国研） |
| ＜千葉県＞ | |
| 1 | 『上総国長柄郡茂原町誌』 板倉胤臣 同左 42 頁 1891（明治 24）年 B |
| 2 | 『千葉県史談』 生徒用 斎藤寛次郎編 普及舎 1894（明治 27）年 A（東書・ |

国研)

3 『香取郡郷土小誌』 岩堀角次郎 東総文庫 38 頁 1905 (明治 38) 年 B
＜茨城県＞

1 『鹿島郡史談』 下生成安編 教育書房 28 丁 1892 (明治 25) 年 A

2 『那珂郡沿革誌』 小田野辰之介 小貫彦臣 上・下 (20 丁+14 丁)
1897 (明治 30) 年 A

3 『郷土地理歴史講義録』 高橋正賢 新々堂 郷土地理 7 丁+郷土歴史 12 丁
1896 (明治 29) 年再版本 初版 1895 (明治 28) 年 A

4 『下妻史談』 湯沢恒徳 渡辺仲蔵 8 丁 1897 (明治 30) 年 A *真壁郡
＜群馬県＞

1 『上野国史談』 大塚浩編 群馬・木田書店 1893 (明治 26) 年 A(東書)

2 『上野国史談』 米田勝之助編 前橋・川端貞作 1895 (明治 28) 年 A(東書)

3 『小学校生徒用上野史談』 堤辰二著 前橋・煥乎堂 1895 (明治 28) 年 A
(東書・国研) 国研本 1897 (明治 27) 年

4 『小学校教師用上野史談』 同上 同上 1895 (明治 28) 年 B(東書)

5 『歴史科生徒用小学上野史』 岩上^{まさい}正^{あきら}著 煥乎堂 1899 (明治 32) 年訂正 3 版
A 訂正 4 版 1900 (明治 33) 年 (東書・国研) 国研本—1895 (明治 28) 年

6 『郷土誌』 折原佐助編 前橋・折原佐助 46 丁 1901 (明治 34) 年 A(国研)
＜栃木県＞

1 『下野志』 上・下 岡田順平・岡田熊太郎 観光堂 1894 (明治 27) 年再版 A
初版 1893 (明治 26) 年

2 『小学下野誌』 松本丑松編 内山港三郎 38 丁+4 丁 1895 (明治 28) 年 A
(国研)

*「地誌ヲ授ケ兼テ古今ノ事情ヲシラシメ」「学校所在地ノ地理及ヒ史談ヲ授ケ
(中略) 地理歴史デハ忠君愛国ノ情ヲ忘ルベカラズ」

5 東日本の 3 地方の郷土史教科書の特徴

—北海道地方・東北地方・関東地方の郷土史—

明治中・後期における東日本 3 地方の郷土史教科書を概観してきた。北海道、東北、関東の 3 地方で発行された郷土史の内容を類型化していくことで、地域的な郷土史教科書の特徴を見て行くことにする。

第 1 の類型は、郷土史を学ばせる目的を愛国主義の思想に置くもので、国家への忠誠心を育てるための史実を選択して配列する教科書である。『青森県史談』がその典型

的な教科書である。生徒に「愛国の思想を発起」するため編纂したとしており、愛国思想の根底に郷土愛が必要として、郷土愛を育むために家族・学校の話から始めて郡市町村の史実を教えている。その後で「今上天皇の御盛徳」「我国柄」を強調していく構成である。『福島県郷土史談』は、古代史において先住民族の蝦夷人居住から始めるが、平安初期の桓武朝期に「皇沢に浴す」、「蝦夷の叛乱」、「坂上田村麻呂」の項で朝廷への忠誠心を記述している。郡史レベルの『埼玉県入間郡地誌史談』1896（明治29）年でも、郷土の史実の取り扱い方において郷土愛から愛国心の育成を強く説いている。

第2の類型は、郷土の統治者を中心にした人物史、郷土の古墳、史跡に重点を置く教科書である。府県レベルと郡史レベルの多数の郷土史教科書がこのタイプである。人物史では、郷土の統治者や有力な政治的支配者による事歴を説明するものが多い。『新撰秋田県史談』『福島県郷土史談』『香取郡郷土小誌』（千葉）『香島郡史談』（茨城）『郷土地理歴史講義録』（茨城）が主なものである。しかし、なかには人物史の扱いで支配者だけでなく、郷土の発展や繁栄をもたらした郡や在地町村の指導者が選ばれており、郷土方面のみで知られる神社仏閣、史蹟の沿革を書く教科書も見られる。『埼玉県北埼玉郡郷土史談』1895（明治28）年は地元の利根川改修・用水路工事が描かれ、地域の発展の重要な事象を伝えようとする郷土史教科書である。

第3の類型は、郷土史の最初に考古学や民俗学の知見を書き込み、新しい時代区分法を採用している郷土史教科書である。東北地方の県レベル、郡レベルの郷土史には先住民族の蝦夷の記述が見られ、石器時代やアイヌ民族（蝦夷の人々）の生活史を郷土史の最初に書いている。山形県の『庄内史』1893（明治26）年と『庄内歴史』1911（明治41）年が最も詳しい。北海道の『札幌区史』・『函館区史』は、石器時代や蝦夷から書き起こしている。

第4の類型は、郷土意識を鼓吹して郷土人としての誇りを持たせようとする教科書である。典型的な郷土史は、岩手県の『遠野史談』・『遠野小誌』、福島県の『福島県郷土史談』、会津の『会津日史』・『会津史』である。後者は、戊辰戦争の記憶を郷土人に忘れさせまいとして編纂・発行した郷土史である。東北地方の郷土史教科書には、明治中・後期では戊辰戦争の記憶は色濃く残り、郷土史教科書に強く反映しようとした。北海道も東北からの開拓移住の記憶を伝える郷土史が編纂され、『有珠虻田史』1911（明治41）年は故郷の地名を冠した「伊達村史」の書名を変更したものであった。

第5の類型は、郷土史の叙述形態として、家族史から始め、学校史へ、次に近傍の町村史、郡史、旧国史・府県史へと進めて行く郷土史教科書である。東北地方の『青森県史談』、『新撰秋田県史談』、『福島県郷土史談』に見られたが、関東地方ではあまり採用していなかった。明治10年代の直観主義的教育方法論を継承した「目撃できる学校近傍」の学習から始める郷土史の叙述である。山形県東置賜郡須崎尋常高等小学

校編『郷土地理歴史』が典型である。最初に教室で地理学の基本概念（位置・方角・距離・面積）を教えて、学校（校舎の平面図）へと進めて行く。次に、郷土の吉島村の歴史、東置賜郡の歴史、米沢地方、山形県の歴史へと広げていく方式である。郷土の地理と歴史を緊密に結びつけて教えようとしている。子どもの歴史意識の成長・発達を意識したものともいえるが、学ぶ内容を単純に適用したものといえよう。

第6の類型は、生徒自身の経験や体験の「近接するものより始める」郷土史で、明治以降に急激に変化する地域社会の事象・事蹟の淵源を生徒が尋ねて歩く方法を取る教科書である。『東京府史談』1892（明治25）年は、明治維新で急速な変貌をとげていく地域社会の歴史を知らせる郷土史である。府下古今の沿革、府民の風俗、習慣、新規開発の事業などを探求させていく。実地見学・観察と結びつけた郷土史の手引書や学習帖が登場してくる。『東京郷土地誌 遠足の友』1903（明治36）年は、鉄道や船の旅行を通じて生徒の歴史的視野を広げさせようとした。郷土の史跡見学や観察を通じて新しい経験や体験をさせ、生徒に新たな歴史的意味づけを持たせようとした。

以上のようなさまざまな類型の郷土史教科書が発行されており、高等科の歴史科入門の学習では多彩で多様な郷土史の教育が行われていた可能性がある。郷土史に続いて、日本歴史の教育が行われていくことになるが、検定期の日本歴史の教科書検討は、次の課題としたい。明治中・後期の日本歴史の教科書を丁寧に検討してみたいと考えている。